

## 特集

# 記憶を次代に繋ぎ、活かすために「協同」は何をすべきか？

2025年は太平洋戦争が終結してから80年を迎える節目の年でした。幸いというべきか、日本では「戦後」が80年に渡って続いてきましたが、昨今の世界情勢から、日本でもいずれ「戦後」が終わり、「戦前」になるかもしれないといった危惧が広がっています。実際、2022年末には、タレントのタモリ氏がテレビ番組の中で、「来年はどんな年になりますかね」と聞かれた際、「新しい戦前になるんじゃないですかね」と答えたことが話題になったこともありました。

戦後90年、そして戦後100年をめざそうとした際、外交等の問題も当然重要ですが、同時に戦争の記憶の継承も避けて通ることのできない課題です。

なぜ戦争は起こったのか。あの時何があったのか。徐々に戦争を経験した世代が鬼籍に入っていく中で、日本の戦争の記憶をどのように次代につなげていくのか。つないだ記憶をどのように活かしていくのか。

本特集では、そうした戦争の記憶の継承にかかわる実践を学ぶとともに、記憶の継承において協同という仕組みが果たした役割、そして果たしうる役割についても考えてみたいと思います。

まず取り上げるのは、日本原水爆被害者団体協議会の活動です。2024年にノーベル平和賞を受賞された被団協の活動

は、核兵器の使用可能性すら高まる今日、極めて重要な意味を持っています。次いで日本の生協の平和活動について取り上げます。「平和とよりよい生活のために」をスローガンとして、戦後生協が取り組んできた平和活動の今と課題を考えます。また、次代につなぐという点で非常に重要となる若者と平和については、大学生協の学生委員の皆さんと座談会を行いました。若者は平和についてどう感じているのかを率直に語っていただいています。さらに、日本の戦争の歴史を語る際には、加害の側面にも注目しなければなりません。この点については、今なお続く在日コリアン問題という視点を含め、京都にあるウトロ平和祈念館の取材を通じた論考をお寄せいただきました。今なお続く問題という点では、沖縄の問題も避けては通れません。沖縄戦の経験を持ち、米軍基地の7割が集中する沖縄における記憶の継承の意味とはいかなるものか。最後には、全国各地には多くの戦跡が存在しています。歴史の証人ともいえる戦跡をどう活かしていくのかという実践についても取り上げます。

いずれの記事も、戦争の記憶の継承という点で無視しえない論点です。戦後81年目の今年、改めて戦争について考える一助としていただきたいと思います。

(本誌編集長 加賀美太記)